

メンちゃんこと恩師の
M先生の想い出

第三クラブ理事 佐藤人海

明治生まれの薄田泣菫の詩「ああ大和のあらまばしかばいま神無月」から中学校時代の英語担任M先生を思い出す。三年生の修学旅行で奈良へ行く時には、この詩と英国のプラウニングの詩を対比して憶えさせられた。先生の授業は生徒の興味や関心のある事と絡ませて展開するので大変親しみ易く、苦手な英語にも興味を持つようになった。これは単なるテクニクではなく先生の学職教養の深さから来ることを後年になりやっと悟るのである。先生は、作家の山本周五郎と小学校以来、終生の友であり、生徒が授業に疲れてくると、その合間に周五郎との思い出話をされたのも楽しみの一つだった。恩師M先生のおだ名は「メンちゃん」。生徒が悪さをすると七面鳥のように顔を真っ赤にして叱ることが由来。生徒のことを思って真剣に叱るので悪童にとつて最も怖い存在だった。先生の存在は、凜として威厳があり、まさに師という呼び名がふさわしい方だった。一方で先生は、病気で授業を休む生徒には、授業内容をプリントして友人に届けさせ、自宅で勉強するようにきめ細

かいフォローをする優しい先生でもあった。同窓会をするに必ずM先生の思い出話に花が咲く。M先生のように魅力あふれる方が今の教育界にどれだけのいるのだろうか。薄田泣菫が倉敷市連島出身で生家も残っていることを後日知った。これも縁である。